

コメントの概要

小田淑子

《はじめに》

井上克人先生追悼研究会では、井上先生の薫陶を受けた若手研究者たちが研究発表を行い、井上先生の研究者仲間も多く参加された。その中に京大宗教学出身の後輩が多いことに驚いた。私はその時に改めて、井上先生が宗教哲学者たちとの交流が深かったことを知った。私も関西に戻った頃には、京都宗教哲学学会の編集委員を務めた時期もあったのだが、残念ながら、井上先生と一緒に仕事をする機会はなかったことにも気づかされた。

発表者たちは井上先生の論考と最新著作をよく理解し、各自の研究テーマを井上先生の理論モデルを用いてさらに展開しようとしている。この研究態度は師と弟子の模範的關係で、追悼研究会という場にふさわしく、井上先生のお人柄を反映しているようにも思われた。私はこの発表者たちへのコメントを依頼されて、少し戸惑った。井上先生とのお付き合いの長さを考えれば当然だろうが、私は宗教哲学の専門ではなく、宗教哲学に共感的でもなく、むしろ批判的であることを公言してきたからである。私のコメントはこの追悼研究会の雰囲気壊しかねないと感じた。だが、井上先生も私の性格はよくご存じであり、ここで遠慮し取り繕うこともしたくない。このように居直って、せつかくの機会を頂いたので、宗教哲学それ自体への疑問と批判を述べ、私のコメントとしたい。このコメントは、できるなら、井上先生に対してきちんとした形で伝えるべきものだったとも感じている。

《宗教哲学と宗教学》

宗教哲学と実証的宗教学の互いの無関心を簡単に概観するつもりで準備を始めると、この問題は宗教学の創設期まで遡ることに思い至った。宗教哲学は一方でプロテスタント神学と、他方でドイツ観念論や実存哲学などと研究テーマを共有し、親密に交流しつつ宗教思想研究として発展したが、文献のない先住民の宗教にはほとんど関心を示さず、カトリックキリスト教との交流も少なく、教会と儀礼の問題に

は疎い。日本の宗教哲学は、大乘仏教思想の一部（主に禅宗と浄土真宗、華嚴思想）と儒教思想の一部を取り入れ、西田哲学以後、京都学派哲学として独自の発展をしたが、仏教の儀礼や教団に言及することはなく、神道儀礼や多くの民間信仰、新宗教の考察もほとんどない。結果的に、宗教哲学者のすべてではないが、相当数の人が、宗教哲学を宗教学とは無関係で、哲学の一分野と認めているように見える。これに対して、先住民の宗教（未開宗教）や古代宗教の研究を主潮流として、19 世紀半ばのヨーロッパで創設された宗教学は、キリスト教による未開宗教への蔑視を警戒し、神学からの独立を宗教学の存在理由として強調した。かくて、宗教学と宗教哲学の互いの無関心は、今さら批判しても無駄かと思うほど根が深い。

だが、互いの無関心が宗教研究にとって望ましいはずはない。この点に注意を向ける研究者は少ないが、何人かはいた。一人は神学者であり、宗教学古典である『聖なるもの』を著したルドルフ・オットーであり、もう一人は神学と宗教哲学を広義の宗教学の規範的研究部門に配置したヨアヒム・ワッハである。二人を含め、宗教現象学に関与した宗教学者も、程度の差はあるが、両学問の交流に関心をもっていた。付言すると、武内義範も宗教現象学に関心が深く、何度か IAHR（国際宗教学宗教史学会）に参加して、キタガワやエリアーデ、W・C・スミスなど海外の宗教学者と親しかった。武内は退官までの数年間ずっと宗教学概論で宗教学を広く紹介し、出版準備として講義録音を残したが、宗教現象学の著作は書かれなかった。その後、エリアーデの没後間もなくエリアーデ批判が激しくなり、同時期に盛んになったオリエンタリズムとポストコロニアリズムが 19 世紀以後の欧米の人文学の貴重な遺産を全面否定した。その潮流のなかで、宗教現象学もいつの間にか消えた。

ワッハの統合的宗教学の図式から神学と宗教哲学を外す宗教学者が大半を占めるが、私はワッハ宗教学の統合性を高く評価する。規範的研究は教義・思想研究を偏重し、時に神学的に陥ると、記述的研究から嫌われるが、その半面、宗教体験や信仰に深い洞察を示すことも多く、宗教学に刺激を与える。宗教学者も宗教哲学を多少は学んでほしい。それ以上に宗教哲学者は宗教学を学んでおくべきである。宗教学哲学者の大半は大学で一般教養や教職科目の宗教学を担当するからである。宗教学では多種多様な事例研究を知ることでも大事で、片手間でできる学問ではない。宗教学を知ること、宗教哲学と宗教思想研究が豊かな宗教世界のごく狭い領域に過ぎないことに気づき、西田哲学や西谷啓治など宗教哲学研究が看過した宗教の問題とは何かを考えてほしい。

《宗教哲学における宗教とは何か》

宗教哲学が論じる宗教は、ほぼ宗教思想に限られる。西田の逆対応や宗教的要求、鈴木大拙の即非の論理、井上先生の露現と覆蔵理論も、山中氏が取り上げた西田哲学における華嚴思想もこれらの一例である。これらの議論の第一の特徴は、総じて宗教が宗教の歴史的形態および諸宗教から切り離して論じられることである。超越者の形而上学的次元が論じられることも多く、それはまさに歴史を超えた世界に焦点が絞られる。第二に、仏教やキリスト教から教義や思想を取り出して論じる場合でも、それを個別宗教の問題としてではなく、宗教一般として論じられることが多い。これは第一の特徴とも重なり、宗教一般それ自体は歴史的世界には存在しない。

宗教哲学で論じられる宗教が理性で神や宗教を創出する理神論ではなく、真の宗教であると主張するなら、それは歴史的宗教でなければならない。しかし、教義と宗教思想だけで成立する宗教は歴史的世界には存在しない。個々の宗教は必ず信仰共同体と儀礼など多様な形態と現象をもつ。まず、その理由を以下に説明する。それを踏まえて、宗教哲学が論じる宗教一般は歴史的宗教だと言えるのかを問い、宗教一般と歴史的宗教の関係をどのように説明すべきなのかを考えたい。

ワッハからキタガワに伝わる宗教学では、宗教には宗教共同体が必要だと教える。それは宗教の真理が非合理だからである。非合理的な真理は理性によってその真偽を判定できず、ただ信仰者による真理の確証・保証を必要とする。神の啓示や創唱者の教えを正典化した聖典は信仰共同体によって編纂される。ただし、聖典宗教の伝統が確立された後には、神学や教義学が生じて、理性による宗教的真理や教義解釈も始まる。神学は先住民の宗教には存在しないが、すべての宗教に信仰共同体は必要不可欠である。先住民の宗教、仏教、キリスト教、日本の新宗教もすべて宗教共同体を基盤に存続してきた。逆に、古代ギリシャ・ローマの宗教は、その信仰者がキリスト教に改宗して古代宗教を捨てたら、消滅し、神殿は遺跡になった。これが宗教史が示す事実である。ところで、理神論は理性によって新しい神を唱えたが、既存宗教の改革や分派を目指す活動を起こさず、新宗教創設の運動も起こさない。つまり信仰者を集めることはなく、特に新しい神の真理性の保証も求めず、思想に留まった。この点で、理神論は歴史的宗教とは異質で、哲学の一部である。

どの宗教の真理も非合理だが、神の啓示に代表されるように、神が自己顕現して、人々にその存在や教えを示す。宗教には物語や神の彫像・画像、神の荘厳を象徴する祭壇や建築、さらに儀礼などがあり、それらを通じて子供も無学な者も宗教を理解することができる。宗教は親から子供への世代間伝承により共同体が存続

し、宗教が存続する。この点が哲学と宗教との顕著な相違である。哲学は共同体を必要とせず、本が残れば、後世の人がその合理的真理を学ぶことができる。近代以後の宗教研究の場では、研究者は著作によって未知の宗教を学び研究するが、歴史的宗教においては本のみで宗教を知ることも皆無ではないが、例外的である。しかも研究者とは異なり、信仰者は本による宗教理解に留まらず、具体的な宗教に入信して歴史的宗教に関わる。

このように、創唱者以外の個人が勝手に宗教や神に出会うことはなく、既存の宗教に触れて宗教を知るしかない。劇的な宗教体験に比べれば、取るに足らない日常的な宗教との接点だが、宗教の全体像を理解するには無視すべきではない。だが、宗教哲学は宗教の歴史的形態を切り捨てて宗教を論じるため、この過程が考察から省かれる。鈴木大拙は自己の宗教体験を語り、母親から真宗に親しんだと記述した。宗教哲学としては例外的で、それだけ宗教家に近いのかもしれない。宗教学から宗教を捉えている私には、大拙の叙述に納得する。だが、西田哲学、その後の西谷啓治と続く宗教哲学では、歴史的宗教から切り離された宗教、宗教一般が論じられる。今回、喜多氏の発表の中で考察されていたテーマが、西田哲学における逆対応と平常底および宗教的要求という問題である。この事例に関して、宗教学の立場から見ると、何が疑問で何に批判的なのかを示して、考えてみたい

西田哲学の宗教論では、宗教、絶対者、神、仏と呼ばれ、特に個別宗教に依拠せずに絶対者のあり方や宗教的要求が「心霊上の事実」として説明される。宗教的要求は個人の内奥の神からの呼びかけだと西田は記す。もし「仏教の場合」といった限定が付されるなら、西田の説明は仏教の具体的事例の宗教哲学的解明だと理解できる。だが、宗教の説明がすべての宗教に妥当すると主張したいなら、せめてキリスト教や神道に適用した事例を示すことが必要で、逆に一定の宗教には適用できないなら、その点に言及が必要だろう。特に疑問に感じる点は、どの宗教も知らない人が困窮したとき、必ず宗教心を起こすと言えるのか。たとえ宗教心を起こしたとしても、未知の神からの呼びかけは恐らく怖いだけで、人はその神の声に従うだろうか。未知の神に出会うのは創唱者のみで、創唱者がその神の真理性を納得するのにどれほどの苦労があるかは、宗教学の教祖論などで周知である。では、西田にとってこの神は自明の神であるなら、それは西田が伝統宗教の神か仏を前提に論述していることになり、それは宗教哲学の場でなく、神学に近いのではないか。

さらに西田の宗教論の叙述を分析すれば、その説明は伝統宗教の思想家や神秘家が宗教体験をした後に初めて見ることができる宗教的真理の世界だと推測される。高い境地に至った宗教者から見える絶対者のあり方が説明されていると思われる。迷いの中にいる人には見えていないが、高みの境地からは、迷う人が宗教心を起こ

したなら、そこに神からの呼びかけがあったと説明している。このような宗教的真理の解明は、共通の信仰を前提とする神学にふさわしく、そこでは、宗教心が神からの呼び声であることの説明も疑いなく納得される。神学では、西田の説明は弟子や信徒の間で貴重な導きとなるだろうが、信仰を前提としない宗教哲学では、誰もが理性によってその宗教的真理を知ることはできない。ただし、具体的な事例を挙げて、その宗教哲学的説明として論述するなら、宗教哲学にふさわしい論述となり、誰もが理解することができる。

西田の宗教論の論述の仕方は宗教哲学の典型とは言えないかもしれない。最近では個別事例を挙げ、その哲学的解明が増えており、宗教一般の説明でも西田よりはるかに慎重になされ、神学的な論述もほとんど見られない。しかし、今日の宗教哲学においても、世界の諸宗教の多種多様性への配慮はまだ不十分で、宗教学の成果への目配りも少ないままである。西田が取り上げた宗教的真理には、絶対者と個人は顕著に存在するが、信仰者の共同体も儀礼も存在しない。西田は平常底は歴史の次元に根を下ろしていると主張したが、歴史に根を下ろすとは、共同体や儀礼に加え、日常生活の諸問題を抱え込むことを意味するにもかかわらず、そうした日常生活の様子への言及はまったくない。西田にとって歴史に根を下ろした平常底が具体的にどのようなものか、ぜひ知りたいことだが、事例を示さない限り、西田の主張は説得性を欠くと言わざるを得ない。

これは学問的態度とは関係ないが、日本人には教団嫌いが多く、教団が成立すると煩わしい問題が増え、宗教の墮落も始まると感じる人も少なくない。教団のない宗教なら、煩わしさも宗教の墮落も生じない。宗教的真理を純度高く保つことができる。しかし、ワッハとキタガワが鋭く指摘したように、宗教は哲学と異なり、その真理が非合理であるゆえに、信仰共同体による真理の保証を必要とする。それがなければ、宗教として存続できない。共同体のない宗教は純度高く保てるように見えても、それは宗教としては存続できず、理神論に留まる。この意味で、宗教哲学が提示する純粋な宗教モデルは理神論に留まり、理想の宗教ではない。

宗教哲学が宗教一般を提示することに、限定や具体的事例で補う必要を何度か求めたが、宗教学でも「どの宗教でも神が自己顕現する」と記したように、個別宗教の事例研究に留まらず、宗教の一般理論を目指してきた。その意味で、宗教哲学が宗教一般の解明を目指すことを全面否定するつもりはない。ただ従来の宗教哲学における宗教一般は、宗教史全体から見ると非常に狭い領域しか考察せずに「宗教一般」と提示することに対する批判であることを付け加えておきたい。

《最後に》

宗教哲学が宗教の歴史的次元を切り捨てて宗教を宗教一般として論じてきた原因を少し推測してみよう。日本の宗教哲学は、仏教者の一部が伝統的教義学の外で、西洋哲学を取り入れた仏教の近代的解釈を試みたことが発端の一つだった。その研究は仏教の近代化を目指したが、檀家制度は放置したまま、教義解釈の近代化を行った。ここにすでに仏教の教義とその他の歴史的形態を分け、後者を軽視・無視する傾向が見られた。同じ傾向が宗教哲学にも受け継がれて、宗教の歴史的形態や現象は考察の対象にならなかった。

しかし、教義と歴史的形態の切り分けは近代以後の仏教研究の場面で初めて生じたのではなく、日本仏教の中に教義仏教と生活仏教との相違が二面性として存在した。つまり経典と教義研究が示す教義仏教と、僧侶が檀家をまわり、家制度と先祖崇拜と深く結びついた死者儀礼を実践する生活仏教（葬式仏教）とは乖離しつつも、この二面が同じ仏教の中で共存し続けている。仏教の歴史的次元を研究するには、教義だけでなく、日本の家制度と先祖崇拜、神道や儒教の影響などの関係を調べ、さらに地域社会と神道との関わりとその時代による変化までも調べる必要がある。宗教哲学者からは「だから、宗教の歴史的次元は宗教哲学の守備範囲ではない」と反論されるだろうし、実際のところ日本仏教の歴史的研究は日本史研究者にゆだねられ、宗教学者でも詳しい研究者は少ない。

このように概観すると、宗教哲学が宗教の歴史的次元を無視してきたことにも歴史的背景があり、その是正は容易ではないだろう。宗教哲学者が宗教の歴史的次元を具体的に研究する必要はないが、少なくとも宗教学の研究成果への配慮は欲しい。宗教哲学は各宗教・宗派の神学・教義学から独立しているメリットを生かして、広い視野から教義を考察することができるし、その必要もあるだろう。具体的には、宗教哲学は日本の神道の伝統をどのように捉えるのか、さらに言えば、先祖崇拜の混在した仏教の死者儀礼、いわゆる葬式仏教をどう捉えるのだろうか。日本仏教の教義学は神道に言及しないが、宗教哲学は今日の日本に存続する神道や葬式仏教を自身の固有の立場から「宗教一般」に含めて考察することができるし、またその考察が必要なのではないか。従来の宗教哲学が積極的に考察しなかった領域だが、今後はより広く宗教の多種多様性を知り、考察してほしい。特に現在の日本は、家と家族のあり方が変化し、葬儀の簡素化と墓じまいなど宗教にも影響が出始めている。こうした問題は宗教学、宗教社会学などで研究されているが、宗教哲学がこれらの現代の問題にどのような視点から切り込み、どのように考察するのかを知りたい。